

二重否定表現「ぬことなし」をめぐって

——源氏物語を資料として——

西田隆政

Double Negation “Nukotonashi”

——Using *The Tale of Genji* as a Point of Reference——

NISHIDA Takamasa

Abstract: The double negation “Nukotonashi” in *The Tale of Genji* has a limited range of use. It is fundamentally restricted to the verb for which it is employed in conjunction with a negative auxiliary verb. The verbs are restricted to those which show the meaning of ‘a satisfactory evaluation’ (“Aku”) and ‘careful consideration’ (“Oboshiitaru”). So it is appropriate to suppose that it has not become common to define “Nukotonashi” in *The Tale of Genji* as showing a double negation. “Nukotonashi” may be considered as a pre-stage of the double negative, compared with “Naikotowanai” in modern Japanese, which is listed in the dictionary.

要旨: 源氏物語における二重否定表現「ぬことなし」は、使用範囲が限定されるものである。基本的には、否定の助動詞が接続して使用される動詞にかぎられている。そして、その意味も、「あく」のような満足の程度、「おぼしいたる」のような配慮のいきとどき、といった心的な意味のみである。それゆえ、源氏物語での「ぬことなし」は、二重否定をしめす表現形式として一般化していないとするのが妥当である。現代語の「ないことはない」が一連の「語句」として文型辞典などに掲載されるのと比較すると、まだその前段階にあるとかがえられる。

1 はじめに

否定表現のなかに、二重否定とされる表現形式がある。『日本語文法大辞典』(2001)では、以下のように記述される。

「行かないことはない」というように否定を重ねる表現をいう。英語では否定を重ねて、一つの否定を明確にする表現を *double negation* という。否定の否定で肯定表現になるのが普通である。しかし、単なる否定表現とは異なる側面を持つ。「行かないことはない」は緩やかな肯定となり、「願わずにはいられない」「彼がいないはずがない」は逆に強い肯定表現となる。(p. 594 小松

光三担当)

また、『日本語表現・文型辞典』(2002)でも、二重否定は「婉曲的な肯定、ないしは強調した肯定の表現となる」(p. 33 山口佳也担当)とほぼ同様の記述がなされている。

現代日本語において、二重否定には、さまざまな語形式があり、上記の「ないことはない」「ずにはいられない」「ないはずがない」など以外にも、「なければならない」のような文法上のつよい当為をしめす形式も使用される¹⁾。また、日本語教育においても、グループ・ジャマシイ(1998)では「ないことはない」「ないこともない」「ないではいられない」「ないではおかない」「ないではすまない」「ないでもない」「ないともかぎらない」「ないわけに(は)いかない」「な

ければいけない」「なければならない」の項目があげられており、二重否定が、日本語を学習するうえでも、重要な形式と認識されているのが理解される。

それに対して、古典語においては、二重否定の検討自体がまだ不十分であるようにおもわれる。そこで、この論文では、二重否定のなかでも、「否定助動詞ず(連体形ぬ)+形式名詞こと+形容詞なし」(以下「ぬことなし」とする)をとりあげて、源氏物語における使用例を分析することにしたい。否定の連体修飾節を「こと」がうけて、さらにそれを「なし」が非存在とすることによって、結果的に二重否定の表現となるものである。

この使用例は、比較的まとまった使用例をみることができ、さらには、肯定の連体修飾節をうける形式名詞「こと」+形容詞「なし」(以下「ことなし」とする)との比較が可能である。また、現代語にもほぼ同形の「ないことはない」がある点で、さまざまな角度から検討することができるとおもわれる。

2 「ぬことなし」の使用例

まず、「ことなし」の例から調査する。源氏物語中で、「ことなし」は、196例をみることができる。「なし」の全使用数1338例中では14.6%にあたる。それを「なし」の活用形別の使用数で表1にしめた²。

このなかには、「こと」と「なし」のあいだに係助詞や副助詞の存在する76例もふくめてあげている。また、副詞「はた」「をさをさ」などが「こと」と「なし」のあいだに存在する例は全体で9例みることができる。表1では丸かっこでしめてある。これら

については、個別的な分析の際にふれることにする。

その「ことなし」の使用例のうちで、「こと」が否定の連体修飾節のうける例は、合計で21例である。表1の最後に「*否定」としてしめた。「ことなし」196例中の10.7%、「なし」全体数1338例中の1.6%で、けっして使用数のおおいものではない。

そこで、以下、これら21例の使用傾向について、個別に検討していくことにする。

21例のなかで、まず目につくには、特定の動詞に使用が集中していることである。それらに該当するものを、[1]から[18]までに、活用形ごとにあげた³。

[1] ……このことおもひやませたてまつらむと、おほしいたらぬことなく、のがれたまふを、いかなるをりにかありけむ、あさましうてちかづきまゐりたまへり。(「賢木」349-13)

[2] 大将の君は、さらぬことだに、おほしよらぬことなくつかうまつりたまふを、御こちなやましきにことづけて、御おくりにもまゐりたまはず。(「賢木」354-11)

[3] 「…おとどのよろづにおほしいたらぬことなく、おほやけがたの御うしろみはさらにもいはず、…」(「漣標」513-12)

[4] 「…まことの御親ときこゆとも、さらにかばかりおほしよらぬことなくは、もてなしきこえたまはじ」など…(「胡蝶」799-3)

[5] かくおほしいらたぬことなく、いかでよからむことはと、おほしあつかひたまへど、…(「行幸」885-1)

[6] 年月ふるままに、御伸いとうるはしくむつびきこえかはしたまひて、いささかあかぬことな

表1

	φ	も	は	なむ	こそ	し	など	計	全体数	*否定
なく未	1							1	10	
なく用	77	21					1	99	519	12
なう	4							4	31	
なし	10	11	4(2)					25(2)	197	4
なき	20(1)	7	4					31(1)	344	3(1)
なけれ	5(2)	4	6		1	1		17(2)	103	1
なから	2	2						4	40	
なかり	6	9	3	1(1)				17(1)	82	
なかる									2	
なかん							1(1)	1(1)	10	1(1)
計	120(3)	54	17(2)	1(1)	1	1	2(1)	196(7)	1338	21(2)

く、へだてもみえたまはぬものから……（「若菜下」1134-13）

[7] 宮たちの御あつかひなど、とりもちてしたまふさまも、いたらぬことなく、すべてなにごとにつけても、もどかしくたどたどしきことまじらず……（「若菜下」1163-4）

[8] ……みづからの御こちには、この世にあかぬことなく、うしろめたきほどしだにまじらぬ御身なれば……（「御法」1381-5）

[9] 御かたちよりはじめて、あかぬことなくみゆる人の御ありさまおほえなり。（「竹河」1467-9）

[10] ……おほやけにもわたくしにも、御いとまのよし申したまひて、まつりはらへ、よろづにいたらぬことなくしたまへど、ものの罪めきたる御やまひにもあらざりければ、なにのしるしもみえず。（「総角」1657-10）

[11] おほかたのことをこそ、宮よりはおほしおきつめれ、こまやかなるうちうちの御あつかひは、ただこの殿より、おもひよらぬことなくとぶらひきこえたまふ。（「早蕨」1689-4）

[12] 「……かくしひそめて、さる心したまへ」など、おもひいたらぬことなくいひおきて、（「浮舟」1905-5）

[13] これは、人の御きはまさりて、おもひなしめでたく、人もえおとしめきえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。（「桐壺」23-3）

[14] 若君の御めのとたち、花散里なども、をかしきさまのはさるものにて、まめまめしきすぢにおほしよらぬことなし。（「須磨」406-12）

[15] 人しれぬあはれ、はたかぎりなくて、御いのりなどおほしよらぬことなし。（「薄雲」616-3）

[16] 帝の御むこにてあかぬことなし、とぞ世人もことわりける。（「浮舟」1890-3）

[17] 少納言は、いかうしもやとこそおもひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、おほしいたらぬことなき御こころばへを、まづうちなかれぬ。（「葵」323-8）

[18] 女もねびととのひ、あかぬことなき御さまどもなるを、身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子もふきはなちて、たてるところのあらはになれば、おそろしうてたちのきぬ。（「野分」865-7）

[1] から [12] まだが「なく」の12例、[13] から [16] まだが「なし」の4例、[17] [18] が「なき

の2例である。これら18例の動詞のうちわけは、「あく」が [6] [8] [9] [13] [16] [18] の6例、「いたる」が [7] [10] の2例、「おほしいたる」が [1] [3] [5] [17] の4例、「おほしよる」が [2] [4] [14] [15] の4例、「おもひいたる」が [12] の1例、「おもひよる」が [11] の1例である。ただし、「いたる」以下の5つの動詞は、すべてほぼ同じ意味で使用されるので、まとめて検討する。

まず、「あく」は、基本的に否定の助動詞とともに使用される動詞で、源氏物語中では162例中155例がそれに該当する。ここにあげた「あかぬことなし」のような場合、「満足しないことが存在しない」と十分に満足していることをしめす。たとえば、[18] では、野分の直後に六条院で紫上を垣間見した夕霧の印象をのべたものである。夕霧は、紫上の完璧ともいえるうつくしさを、つよく心に印象づけられている。

そして、その逆の事態をあらわす例として、「あかぬことあり」という例も存在する。

[19] 御髪のみだれたるすぢもなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまでみゆれば、年ごろなにごとをかあかぬことありておもひつらむと、あやしきまでうちまもられたまふ。（「葵」302-12）

[19] は、光源氏が出産直前の葵上をみて、長年彼女のどこを「満足しない点がある」とおもっていたのだろうと反省する例である。そのほかにも、「あかぬこと」には、「あかぬことにやあらむ」（「蛩」814-9）、「あかぬことかな」（「藤裏葉」1013-13）、「あかぬこともあると」（「若菜上」1035-3）、「あかぬことおほかり」（「横笛」1273-7）、「こそあかぬことなれ」（「東屋」1814-3）、「あかぬことおほかるこち」（「東屋」1830-10）と、6例の「あかぬこと」が存在するととらえる例がみられる。

このように、動詞「あく」では、不満足の状態をしめす場合と満足の状態をしめす場合とをつかいわけるために、「あかぬこと」+存在と「あかぬこと」+非存在が使用されている。そして、注意すべきは、「あかぬことなし」は「ぬことなし」の一用法というよりも、「あく」という否定の助動詞が接続して使用される動詞での、否定的事態の非存在にしめすための形式ととらえられる点である。これは、つぎにみる、動詞「おほしいたる」などでも同様である。

「あく」以外の5種類の動詞12例は、基本的に源氏物語中ではほぼ同様の意味で使用されている。いずれも、「配慮がいきとどく」の意味で、その否定的事態

が存在しないことによって、「配慮のいきとどかないことが存在しない」の意味となる。

たとえば、[17]の「おほしいたる」の例では、紫上つきの女房少納言は、光源氏の紫上に対する「配慮のいきとどかないことのない」お心づかいに感動してなくという例である。

そして、これらの動詞のうちでも、「おほしいたる」は全5例の使用例のすべてが否定の助動詞「ず」の接続するものであり、「おもひいたる」も全5例のうち4例が助動詞「ず」で、1例が助動詞「まじ」の接続するものである。これらの動詞は、源氏物語中で否定の助動詞の接続する例以外は存在しない。そして、「あく」と同様に、「こと」を肯定でうける例も存在する。

[20]「……みたてまつりしより、心ことにおもひはべりて、そこにおほしいたらぬことをも、すぐれたるさまにもてなさむことこそ、人しれずおもひはべれ。……」(「少女」683-14)

[21]「……ものさわがしくのみありて、おもひいたらぬこともあらむを、なほおほしめぐらして、おほきなることももしたまはば、おのづからせさせてむ。……」(「若菜下」1163-10)

[20]は、大宮が孫の雲居雁について、父内大臣の「配慮のおいきとどきにならないこともあろうことを」立派にしたてようとおもっていたことを父内大臣につたえる例である。[21]は、光源氏が紫上に「私の「配慮のいきとどかないこともある」が、おおきな仏事などをご自身でされるなら、当然私から手配させよう」と、かたりだす例である。

「おほしいたる」と「おもひいたる」では、否定助動詞との使用の多いの動詞で、否定的な事態を非存在とする場合に、「ぬことなし」が使用されることになる。この点は、「あく」と同様である。

一方、ほかの動詞での否定の助動詞の接続する例は、「いたる」全14例中5例、「おほしよる」全62例中16例、「おもひよる」全114例中50例である。ただ、これらの動詞には、「配慮する」以外の意味で使用される例がある。

[22]「……娑婆のほかの岸にいたりて、とくあひみむとおほせ」(「若菜上」1096-5)

[23]「……このもてわづらはせたまふ姫宮の御うしろみにこれをやなど、人しれずおほしよりけり。」(「若菜上」1030-6)

[24]「やや」とのたまふに、あやしくて、さぐりよりにたるぞ、いみじくにほひみちて、顔にもく

ゆりかかるこちするに、おもひよりぬ。(「帚木」69-11)

[22]の「いたる」は特定の場所に「到達する」の意味で、[23]の「おほしよる」と[24]の「おもひよる」は「気がつく」の意味である。ともに、さきの「配慮がいきとどく」の意味とはあきらかに使用状況がことになっており、この点は「配慮」以外の意味がない「おほしいたる」「おもひいたる」とはことになっている。「配慮がいきとどく」の意味は基本的に否定で使用されるので、それがこれらの動詞での使用例のすくないことにもつながっている。

以上みてきたように、「ぬことなし」に上接する動詞は、「あく」「おほしいたる」「おもひいたる」のように否定助動詞の接続するものと、「いたる」「おほしよる」「おもひよる」のように「ぬことなし」の使用される「配慮のいきとどく」の意味では否定助動詞が接続するものとでしめられている。否定で使用される動詞で否定的事態を非存在とすることでその事態そのものがないということにしてしまう、そのような用法で使用されるのが、源氏物語での「ぬことなし」の使用法の一特徴であるとかんがえられる。

つぎの3章では、これらの動詞での「ぬことなし」以外の二重否定表現について検討する。

3 「ぬことなし」以外の二重否定表現

2章でとりあげた動詞「あく」などは、「ぬことなし」以外にも二重否定表現の使用例をみることができる。連体修飾節をうける形式名詞が「こと」でなく、「ところ」である例である(以下「ぬところなし」とする)。

[25]「……いとさまよう、なよびかに、化粧なども心してもてつけたまへれば、いとどあかぬところなく、はなやかにうつくしげなり。」(「胡蝶」791-4)

[26]女は、いとはずかしとおもひしみてものしたまふも、ねびまされる御ありさま、いとどあかぬところなくめやすし。(「藤裏葉」1004-3)

[25][26]は、ともに女性の容姿に対して「不満なところが存在しない」とする評価で、[25]は玉鬘、[26]は雲居雁の例である。「あかぬところなし」の例は、ほかにも3例みることができ、いずれも女性の容姿について上位の評価がなされる。

また、「あかぬところ」が存在するととらえる例もみられる。

[27] 世になくかしづききこえたまひて、さぶらふ人々も、かたほにすこしあかぬところあるは、はしたなげなり。(「総角」1645-8)

[27] は、帝と中宮の寵愛をうけている匂宮の居住する三条宮には、おつかえする女房たちも「どこかにすこしでも不足のところのある者」はいづらそうな様子であるとする例である。これは、[25] [26] とは逆の用法となり、否定的な事態の存在することをしめす例である。

つぎに、「配慮のいきとどく」の意味の動詞について検討する。これらの動詞では、「こと」のかわりに、名詞「くま(隈)」とともに使用される例がある(以下「ぬくまなし」とする)。「くま」は、「空間的に人目につきにくい場所」の意味から、「心のかくされた部分」の意味となり、さらに、否定の助動詞をとまなう連体修飾をうけて形式名詞のようにもちいて、「場所」や「点」のような意味となる⁴⁾。ここにあげた例では、「すみずみまで配慮がいきとどく」の意味となる。「心」とともに使用される例もあり、心的配慮に注意した使用例でもある。[28] の「おもひいたる」、[29] から [32] までの「おもひよる」[33] の「いたる」の計6例が、それに該当する。

[28] かの有明、いでやしぬらむと、心も空にて、おもひいたらぬくまなき、良清、惟光をつけて、うかがはせたまひければ……(「花宴」273-12)

[29] まことの都のつとにしつべき御おくりものども、ゆゑづきておもひよらぬくまなし。(「明石」473-1)

[30] 「……おほえぬ山がつになりて、四方の海のふかき心をみに、さらにおもひよらぬくまなくいたられにしかど……」(「総合」571-11)

[31] ……いであなうたて、いかなることにかあらむ、おもひよらぬくまなくおはしける御心にて、もとよりみなれおほしたてたまはぬは……(「野分」875-1)

[32] ……人のかくしすゑたるにやあらむと、わが御心のおもひよらぬくまなく、おとしおきたまへりしならひに、とぞ。(「夢浮橋」2070-12)

[33] ……頭の中將、ききつけて、いたらぬくまなき心にて、まだおもひよらざりけるよとおもふに、つきせぬこのみ心もみまほしなりにければ、かたらひつきにけり。(「紅葉賀」256-4)

[30] を例に説明すると、光源氏がみずからの須磨の絵日記を評して、おもいがけず山がつのような生活

となって、四方の海辺の深い情趣をみて、さらにそれまでは「おもいよらぬ奥ぶかい部分にも目くばりせぬ点」が存在しないほど絵が上達したというように、「すみずみまで配慮がいきとどく」というたかいレベルの心的な状態であることがしめされている。

また、この名詞「くま」自体、28例中15例が形容詞「なし」とともに「くまなし」として使用される。そして、そのなかの9例が否定助動詞のある連体修飾節をうけて使用されている。さきの6例以外にも3例みることができる。

[34] さもかからぬくまなき御心かな、さばかりいはけなげなりしけはひをと、まほならねども、みしほどをおもひやるもをかし。(「若紫」172-12)

[35] ……すこしゆゑづきてきこゆるわたりは、御耳とどめたまはぬくまなきに……(「末摘花」201-6)

[36] 御はかし、さるべきものなど、ところせきまでおほしやらぬくまなし。(「濡標」490-7)

[34] は惟光が光源氏の若紫に興味をいだいているのをしって「目のとどかない部分がない」すき心と感じている例である。[35] はすこしでもすぐれているとうわさされる女性には「お耳をとどめられない部分がない」とする。[36] は光源氏が乳母を明石の君におくる際におまもり刀などからはじめて「配慮のいきとどかない部分がない」とする。「36」は「おほしよる」などとほぼおなじ意味となっている。

ここでみた [28] から [36] までの「ぬくまなし」の使用例は、2章でみた「ぬことなし」の例よりも、「配慮」の状態が十分であることをしめす例となっている。その点からすると、「ぬことなし」と「ぬくまなし」は、おなじ用法の表現形式で、その程度差をしめすものとして、とらえることができそうであり、類義の表現形式とみることも可能とかがえられよう。

以上検討してきたことからすると、「あく」や「配慮のいきとどく」ことをしめす動詞は、否定の助動詞とともに使用されることがおおく、それを非存在とするときに「ぬことなし」をもちいるだけでなく、「ところ」「くま」などを形式名詞としてもちいる二重否定表現「ぬところなし」「ぬくまなし」としても使用されている。このことは、二重否定がそれだけ特定の動詞での使用に集中し、ほかの動詞での使用自体がみられないものであることを意味している。

とすると、これらの表現自体が、否定的事態を非存在とすることで結果として肯定的事態の存在をあらわ

すという、ひとつの表現形式として一般化しているということはかんがえにくい。特定の意味の動詞でのみ使用される、個別的な用法とでもいうべき位置にあるとみるべきであろう。

4 個別的な使用例

最後に、2章であげた21例の「ぬことなし」のうちで、類例がなく、個別的な使用例である3例について検討する。

[37] おもふさまにかしづききこえて、心およばぬことはた、をさをさなき人のらうらうじさなれば、おほかたのよせおぼえよりはじめ、なべてならぬ御ありさまかたちなるに、宮も、わかき御こちに、いと心ことにおもひきこえたまへり。
(「藤裏葉」1011-13)

[37] は、「心のいきとどかないことといつてもすしもない」明石の方の利発さゆえ、周囲の評判をはじめとして、明石の姫君もなみでないうつくしさに、東宮も格別に大切にしているという例である。動詞「およぶ」の場合、「心」が主体として使用されると「おぼしいたる」「おもひいたる」と類似の意味となりうる。また、「およぶ」も35例中の28例が否定の助動詞とともに使用されるもので、その点も「おぼしいたる」などと同様の傾向である。

ただ、「およぶ」は、「力およばぬ身」(「若菜上」1095-4)や「琴笛のしらべにも、音たへず、およばぬところおほく」(「少女」668-7)のように、「力の不足」や「音楽の技量の不足」など、心的なものというよりも能力的なものをあらわす例がおおくみられる。また、「簾のしたよりやをらおよびて御袖をとらへつ」(「宿木」1738-10)のような、「体をのばす」という具体的な動作の意味での使用例もある。それらの点で「おぼしいたる」などの動詞とはことなつた面があり、べつにとりあげた。

[38] その秋、太上天皇になずらふ御位えたまうて、御封くははり、年官年爵など、みなそひたまふ。かからでも、世の御心にかなはぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例をあらためて、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなりそひたまへば、内裏にまゐりたまふべきことかたかるべきをぞ、かつはおぼしける。(「藤裏葉」1013-4)

[38] は、光源氏が準太上天皇という臣下をこえた待遇となり、そうでなくとも「お心にかなわないこと

はない」が、いよいよ威厳がそわれるようになったという例である。「かなふ」では、98例のうち42例が否定の助動詞の接続するもので、否定で使用される例が半数にちかい動詞である。ただ、なにかが「かなふ」場合は、「おもひしことかなふ」(「紅葉賀」251-14)や、「そのことかなひたまひぬ」(「竹河」1493-8)のように、肯定表現であらわされる。その点では、否定専用の動詞での使用例のとはことなっている。

また、「かなふ」には、「かなはぬことなれば」(「御法」1389-13)や「かなはぬことおほく」(「橋姫」1509-3)と、「かなはぬ」事態が存在することをあらわす例が存在する。[38] は、それを非存在とする例でもあり、結果として、つよい肯定的事態をあらわしているとかんがえられる。

[39] 「……家のうちにたらぬことなどはた、なかめるままに、はぶかず、まばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたくおひいづるもあまたあるべし。……」(「帚木」39-11)

[39] は、馬の頭の女性論で、非参議の四位クラスでもととの家格のひくくない家に、「家のなかになりないことがないのにまかせて」、お金をおしまず、まばゆいほどに大事にされた女性がうまれてくる例もおおい、という議論をしている例である。動詞「たる」は、全13例のうち9例が否定の助動詞の接続する例で、否定で使用される動詞であり、さきに検討した動詞とおなじ使用傾向である。そして、この「なんの不足もない」の意味は、さきの「あかぬことなし」にも通じるものである。

しかし、「たる」は、「よはひたらで」(「絵合」574-3)や「年も六十にすこしたらぬほど」(「橋姫」1537-10)のように、基本的には年齢の過不足をあらわす動詞である。その点で心的なものだけをあらわす「あく」とはちがった傾向をしめす。[39] のような例は、「たる」では例外的な使用例であるが、二重否定表現という点に注目すると、「あく」につながるものと位置づけられそうである。

これらの動詞で、もう一点注意されるのは、この[39] は、[37] とともに、これまでに検討した「ぬことなし」とはちがい、「こと」と「なし」のあいだに副詞の存在することである。「ことなし」の場合は、表1にあげたように、係助詞や副助詞が「こと」と「なし」のあいだに存在する例が76例みられた。しかし、「ぬことなし」には、助詞の存在する例は1例もない。また、この2例以外には、「こと」と「なし」

のあいだに副詞の存在する例もない。

そして、副詞の使用される場合も、[6]の「いささかあかぬことなく」や[30]の「さらにおもひよらぬくまなく」のように、動詞のまえにおかれる。そのなかで、使用例のすくない動詞に副詞の存在する例があるのは、これらがほかの「ぬことなし」とはちがった側面をもつ例であることをしめしている。

ここまでに検討してきたように、「ぬことなし」は、否定の助動詞が接続して使用される、「あく」や「おほしいたる」などの「配慮のいきとどく」ことをしめす動詞専用ともいえる使用傾向をしめしている。それゆえに、それらの動詞以外では、「ぬことなし」の形式はいまだ定着していない可能性があったのではなかろうか。

この点をさらに解明するためには、副詞「はた」「いささか」の用法の問題も関連し、二重否定表現以外の要素も考慮する必要がある。今回は、検討を保留しておきたい。

5 動詞からみた二重否定表現の使用意識

2章から4章までで、源氏物語での「ぬことなし」21例について検討をおこなった。その結果として、以下の6項目を指摘することができる。

- 1 否定の助動詞とともに使用されることのおおい動詞に使用例が集中する。
- 2 心的な面の充実・満足をあらわす動詞で使用され、具体的な動作をしめす動詞等では使用されない。
- 3 「いたる」「およぶ」のような具体的な動作の意味での使用例のある動詞でも、心的な面での例でのみ使用される。
- 4 基本的に「こと」と「なし」のあいだに、助詞や副詞が存在することはない。この点は「ことなし」と使用傾向がことなる。
- 5 否定の助動詞でも「じ」「まじ」や「ざりけり」のような複合形が使用されることはない。
- 6 源氏物語の「ぬことなし」は、現代語の「ないことはない」とちがって、どのような動詞にも接続しうる表現形式ではない。

1については、すでに2章で検討したように、否定表現で使用されやすい動詞において、「ぬことなし」と「ことなし」が対応するような表現形式となってお

り、事態の存在と非存在とをあらわすために不可欠なものとかんがえられる。そして、これらのなかでも注目されるのは、2の心的な面での充実・満足をあらわす動詞に使用例が集中することである。3の特徴もこれに関連するものである。

2章でとりあげた18例も、4章でとりあげた3例も、いずれも動詞の意味は、心的な満足の程度や心的な配慮のいきとどきといった、人の心のうごきやはたらきを意味するものであった。心的な満足や配慮は、えてして不十分であることがおおく、それゆえに、否定での使用がおおいのも首肯される。それが、みだされないことなく、十分な程度にまでみだされるとすることで、心的な面での充足度があらわされている。

また、4と5にあげたように、「ぬことなし」は、一定の範囲の動詞において特定の形式でのみ使用されるという特徴をもつ。6に関しては、源氏物語での「ぬことなし」は、二重否定の一般的な表現形式の「語句」と認識しているというよりも、心的満足度・充実度に関する動詞に限定される、一つの用法とでもとらえるべきものである。このことは、現代語における「ないことはない」が、二重否定の語形としては意識されていても、語形の意味の抽象化や、品詞の変化のような文法性の変化もきたしていない点とも、あわせてかんがえる必要がある。「文法化」の進行をどうとらえるかという問題にもつらなる課題とおもわれる。

6 おわりに

源氏物語においては、二重否定表現「ぬことなし」は、特定の動詞にのみ使用されるものである。しかし、形容詞「なし」の使用される二重否定表現は「ぬことなし」だけではない。「人もしらぬなくなりにたる」（「葵」284-10）や「つらからぬものなくなむ」（「須磨」413-10）のように、名詞の存在しない例やほかの名詞の存在する例もある。

また、「なし」を使用せずに、「しらぬことあらじ」（「若菜下」1147-6）のように、動詞「あり」に否定助動詞の接続する例もある。これらについては、さらに稿をあらためて、検討したいとおもう。

注

- 1) 田中(2002)に近代語における「なければならぬ」定着の過程についての検討がある。
- 2) 源氏物語の調査は、上田他(1994)でおこなった。
- 3) 源氏物語の引用は、池田(1953)により、ページ数

行数をしめした。引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、濁点をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。なお、引用中の下線は、稿者によるものである。

4) 「くま」の説明は、中村他 (1984) による。

参考文献

- 秋元実治 2002『文法化とイディオム化』(くろしお出版)
- 池田亀鑑 1953『源氏物語大成校異篇 1~3』(中央公論社・調査は第9版による)
- 上田英代・村上征勝・今西祐一郎・権島忠夫・上田裕一共編 1994『源氏物語語彙用例総索引 1~5』(勉誠社)
- 大堀壽夫 2004「文法化の広がりと問題点」(『月刊言語』33-4)
- 金水 敏 2004「日本語の敬語の歴史と文法化」(『月刊言語』33-4)
- グループ・ジャマシイ 1998『教師と学習者のための日本語文型辞典』(くろしお出版)
- 工藤真由美 2000「否定の表現」(『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店)
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳成編 2003『日本語表現・文型事典』(朝倉書店)
- 佐久間鼎 1959「否定的表現の意義」(『日本語の言語理論』厚生閣)
- 田中章夫 2002『近代日本語の語彙と語法』(東京堂出版)
- 塚原鉄雄 1990「否定表現雑感」(『日本語学』9-12)
- 中村宗彦・岡見正雄・阪倉篤義編 1984『角川古語大辞典 2』(角川書店)
- 野村 剛 2004「近世スタンダード動詞のアスペクト」(『月刊言語』33-4)
- 浜田 敦 1948「肯定と否定—うちとそと」(『国語学』1—『日本語の史的研究』(臨川書店 1984) に所収)
- 宮地 裕 1979『新版 文論』(明治書院)
- 山口明穂・秋本守英編 2001『日本語文法大辞典』(明治書院)
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. 1993 “Grammaticalization”. Cambridge. UP (『文法化』日野資成訳 2003 九州大学出版会)